

絶海中津『蕉藁』の作品配列について(二)

——五言律詩の場合——

朝 倉 和

はじめに

五山の作者、その名今に徴すべきもの、百人に下らず。しかして絶海、義堂、その選なり。次は則ち太白、仲芳、惟忠、謙岩、惟肖、鄰隠、西胤、玉碗、瑞岩、瑞溪、九鼎、九淵、東沼、南江、心田、村庵の徒、枚挙に堪へず。

絶海、義堂、世多く並稱し、以て敵手と爲す。余嘗て『蕉藁』を読み、又『空華集』を読む。二禪の壁壘を審かにす。学殖を論ずれば、則ち義堂、絶海に勝るに似たり。詩才の如きは、則ち義堂、絶海の敵に非ず。絶海の詩、ただ古昔中世敵手無きのみに非ず。近時の諸名家と雖も、恐らくは甲を棄てて宵に遁れん。(下略)

現在我々が絶海中津(一三三六〜一四〇五)と義堂周信(一三二五〜八八)の漢詩文を以て「五山文学の双璧」と称するのは、結局、ここに挙げた江村北海(一七二三〜八八)の『日本詩史』¹⁾における評

言によると思われる。また、絶海の『蕉藁』や義堂の『空華集』の作品評価も、いまだに江戸時代の評価からあまり出ていないと言つても過言ではない。しかし、近年、薩木英雄氏によって前掲二書の注釈が相次いで刊行され、²⁾両書が正当に評価される日もそれ程遠くはないように思われる。

さて、わたくしは今まで、絶海の伝記を追究してきたのだが、彼の漢詩文を正確に解釈するためには、その作品の詠作状況(時期・場所等)もまた、明らかにされなくてはならないだろう。つまり、『蕉藁』の作品配列の様相を明らかにしなくてはならないのではないだろうか。『蕉藁』全体は、

- ・ 蕉藁序(道衍)
- ・ 五言律詩(一〜三二)
- ・ 七言律詩(三三〜六八)
- ・ 五言絶句(六九〜七九)
- ・ 七言絶句(八〇〜二二八)
- ・ 疏(二二九〜二四二)
- ・ 序(一四二〜一四五)
- ・ 書(一四六〜一五四)
- ・ 説・銘(一五五〜一六三)
- ・ 祭文(一六四〜一六六)
- ・ 書蕉藁後(如蘭)

から構成されているが、例えば画図や扇面に題した、いわゆる題画詩などは、その詩題や詩句から詠作状況を判断することは難しい。本稿では、紙幅の都合上、とくに五言律詩(一〜三二)に注目して、可能な限りその詠作状況を明らかにし、配列順序について考えてみたい。なお、『蕉藁』の引用は『五山文学全集』第二巻、作品番

号は藤木氏『蕉堅藁全注』による。返り点は藤木氏前掲書、入矢義高氏校注『五山文学集』（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二）、梶谷宗忍氏『蕉堅藁 年譜』（相国寺、昭五〇）等を参考にして、私に施した。

一 絶海中津の生涯

本論に入る前に、絶海の生涯のあらましについて確認しておく。

利用した主な史料は、『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）、『勝定国師年譜』（以下、『勝定年譜』と略す）、『蕉堅藁』、『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）である。

○誕生——建武三年（一三三六）十一月十三日（一歳）

○京都修行期——貞和四年（一三四八）〜貞治三年（一三六四）

（十三歳〜二十九歳）

○関東修行期——貞治三年（一三六四）〜応安元年（一三六八）

（二十九歳〜三十三歳）

○中国留学期——応安元年（洪武元年、一三六八）〜永和三年（洪

武十年、一三七七）（三十三歳〜四十二歳）

○九州静養期——永和三年（一三七七）〜永和四年（一三七八）

（四十二歳〜四十三歳）

○近江隠遁期——永和四年（一三七八）〜康暦元年（一三七九）

（四十三歳〜四十四歳）

○甲斐惠林寺住持期——康暦二年（一三八〇）〜永徳二年（一三八

二）（四十五歳〜四十七歳）

○関東再遊期——永徳二年（一三八二）〜永徳三年（一三八三）

（四十七歳〜四十八歳）

○摂津・讃岐・阿波隠棲期——至徳元年（一三八四）〜至徳三年

（一三八六）（四十九歳〜五十一歳）

○鞆寺（等持寺・等持院・相国寺）住持期——至徳三年（一三八六）

〜応永十二年（一四〇五）（五十一歳〜七十歳）

○死没——応永十二年（一四〇五）四月五日（七十歳）

【注】絶海は近江、甲斐、摂津に赴く直前にも、短期間ながら京都に滞在している。また、中国に渡る前も、一旦関東から帰洛していたと思われる。

絶海が中国から帰国した時期については、いまだに統一的な見解は出されていないようである。と、いうのも、『仏智年譜』は、洪武九年（永和二年）正月に金陵（南京）の英武楼において太祖高皇帝（洪武帝、朱元璋。一三二八〜九八）に謁見し、帰国の許しを得た後、康暦元年十月、春屋妙葩（一三二一〜八八）に招かれて雲居庵（天龍寺の開山塔）に住するまでの記載がなく、『勝定年譜』は、永徳三年まで記事を欠くからである。『日工集』永和四年四月廿三日条によると、この日、絶海から義堂に帰京の報告があったという。

さて、『蕉堅藁』所収の「繁全牛の和山上人の関西に帰るを送る詩の序」（一四二）に、以下のような文章がある。

丁巳春。余自三南国回首。謁三箱崎之広蔵精舎。其主人大疑

老人。以余剽劫之餘謀生無聊。而廿年之素。館余平寢。自如偏室。以憩奔走。而全餘喘焉。其德曷可忘也。

これによると、絶海が帰朝したのは、永和三年(丁巳)の春頃ということになる。絶海は「剽劫」の結果、博多で困窮していたところを、箱崎(福岡市東区)にある広厳寺の住持大疑宝信に助けてもらい、同寺においてしばらく手厚い保護を受けたようである。絶海がどのような体験を指して「剽劫」と表現したのか、現在記録が残っていないため、よくわからないが、「さきに南山の盜賊、山を阻つ。横行し、良民を剽劫す」(『漢書』王尊伝)や「城を攻め、邑を襲ふ。剽劫、虜掠す」(『論衡』答佞篇)などの用例を見ると、帰国の途次に海賊に襲撃されたりでもしたのであろうか。中巖圓月(一三〇〇〜七五)の『東海一漚集』巻之一(『五山文学新集』第四卷所収)には、

歳在壬申夏四月、予帰自江南、時罹病、息于博多、秋八月、病愈、遙跋故里、東海渺漫途脩、無有為援者而止、借榻神山間房而臥、有客來問曰、卿見行有輿大鳴道而東者、曰、其人使江南所獲旅犬、獻於閩東某州某官、昇之而進、道傍過者、辟而遠望、不敢近視、子亦江南而來、其為利于國、不若之犬也哉、

〔胡為平賦并序〕

という文章がある。元弘二年(壬申、一三三三)四月、絶海よりも約半世紀前に入元した中巖も、長旅の疲労が出たのであろうか、帰朝した直後に博多で病を患い、静養している。参考までに、玉村竹二氏『五山文学』(日本歴史新書、至文堂、昭三〇)には、つぎのよう

な記述がある。

この筑前・豊後の地は、中国と京都とを連ねる交通の要衝であり、中国渡航の中継地として重要な地位を占めていた。鎌倉時代中期以来、日本よりの渡海僧の数は漸く増加したので、これら幾十幾百の入宋入元僧が、或は便船を待ち、或は帰朝後の休養をとるのは、すべてこの地であった。よって蔣山万寿寺・顕孝寺、殊に筑前多々良の顕孝寺は、これらの禅僧の寄寓地となつた観があつた。(七三頁)

なお、『蕉堅菓』所収の「金剛の物先和尚に与ふる書」(一四六)に、小弟閑遊外邦。遭時孔娘。苟活而帰為幸而已。事業荒陋可耻也。賤跡以三月望。方到輦下。

という文章があることから、絶海が帰京したのは、翌四年の二月十五日頃であらう。

閩東に再遊したことについては、拙稿「絶海中津の閩東再遊について」(『国文学攷』第一六三号、平十一・九)を参照していただきたい。

二 『蕉堅菓』の成立過程

現在においても、五山文学(禅林の文学)の作品集の成立に関する論考はあまり見受けられない。草稿本系統の諸本の成立・発展については、玉村氏が『五山文学新集』第一巻「解題」において、横川景三(一二四二〜九三)の場合を例に挙げて論を展開されている。同解

題のなかには、

横川景三は、生前既にその文名が一世を風靡していたらしく、単に会下に在って、文筆の練磨をしようとする人があったばかりではなく、遠く地方から上洛して、一定の期間、横川の許に寄宿して、特に請うて、その稿本を書写し、以て国にかえつてから後、何かにつけて制作の手本にしようとする僧があつた。(中略)したがって、生前から、幾通りもの写本を生んだことは、容易に想像出来る。しかし以上の例でもわかる如く、これらの人々は、自己の作文の模範として手写して行くのであるから、大部分は、その人の旨好による摘録が多かつたであろうから、横川生前にはその稿本の完全な複本は、他人の手によつては出来なかつたと見られよう。(下略)

(九九二頁)

即ち一々の作品を一紙々別に書いて、人に与えるが、その控が必ず手許にとられたであろう。それが有る程度たまると、自己の全集を編録する目的で、大略制作年代順に冊子に筆録することを、横川自らが絶えず行つていたのではないか。したがつて手録中に、別のひらめきが生ずると、既に用済になつて人手にわたり公表されてしまつた作品に、訂正を加えるのである。(下略)

(九九二頁)

などのように、示唆に富んだ意見が見られる。

翻つて『蕉堅藁』の成立過程について確認したい。『国書総目

録』によると、『蕉堅藁』の諸本には写本一国会図書館蔵(寛政十年(一七九八)書写、頭注・傍注アリ)、内閣文庫蔵(書写年不明、七言律詩・五言絶句・七言絶句のみ)、彰考館蔵(未見)のほか、室町初期版(五山版)、寛文十年(一六七〇)版(訓点アリ)、刊行年不明(訓点アリ)の三系統の版本があり、未見の彰考館本を除いて、諸本間に大きな異同は見られない。ただし、九十三番詩第一首目の四句目「黄昏、月に和して、横斜を看る」に、「黄昏は一に夢魂と作る」という注記があることは注目される。

『蕉堅藁』(鄂隠慧齋編)の序には「永楽元年蒼龍癸未十一月既望。僧録司左善世道衍序」、その跋には「大明永楽元年癸未臘月。天竺如蘭」、「絶海和尚語録」(鄂隠・西胤俊承・叔玠慧璠編。以下、「語録」と略す)の序には「大明永楽元年歲次癸未冬十有二月既望。武林淨慈禪寺住山四明釈道聯撰」、その跋には「永楽二年正月望日。徑山比丘心泰書。時年七十有九」という記述がある。永楽元年は応永十年(一四〇三)、永楽二年は応永十一年(一四〇四)にあたり、絶海の没年は応永十二年(一四〇五)なので、『蕉堅藁』と「語録」は絶海の生前に一応の体裁を整えていたことになる。『蕉堅藁』の跋文に、「樞庭和尚に答ふる書」(一五二)に見られる、然りと雖も、時々山水幽勝の処に逢ひて、衣を披き、策を散じて、猿鳥雲樹の趣きを陶冶し、悠然として物化の元に遊ぶが如し」という文章が引用されていることから、実際に作品集がある程度纏められた後、序や跋が記されたことがわかる。

また、『蕉堅菓』に、

○禪師平生所_レ為詩。凡若干篇。其徒等聞。聚為一帙。題曰「蕉

堅菓」。來求_三余序_二其卷首_一。(蕉堅菓序)

○今觀_三絶海之著作_一。則旧遊風景。俱在目前。其徒等聞上人。

又為_レ之請。輒_レ贊_三語於卷末_二云。(蕉堅菓後)

とあり、『語録』に、

○永樂元年冬。沙門等聞偕_三天龍住山密堅中者_一。奉_レ使來_三皇朝_一。

還_レ國過_レ門。展_レ禮以_三其師絶海禪師四会語録_一。求_レ序。予以_三不

文_二辭不_レ獲_一。(序)

○日本絶海禪師初住_三甲州恵林三住_二相国承天_一四会語録。其弟子

等聞請_レ跋。予以老辭_レ之不_レ獲。(跋)

とあることから、応永十年(永樂元年)に絶海の弟子である龍溪等聞

が『蕉堅菓』と『語録』を携帯して、天龍寺の堅中圭密(第三十六

世)を使者とすする遣明使一行に随行し、両書の序や跋を請い受けた

ことが知られる。『語録』巻下には「聞蔵主を送る」という壮行偈が

ある。

送_三聞蔵主_一

等聞蔵主謹愨通敏篤_三志於道_一。蓋後進之中巖然秀出者也。今

春欽承_三国命_一。將_レ隨_三堅中禪師_一入_三朝大明国_一。求_レ語。乃為誓

策率述_二一偈_一。以勉_三其行_一云

万里南游隨_二使臣_一。觀光正際太平洋辰。石城虎踞山河壯。易水龍

飛氣象新。撥草尋_レ師先哲軌。皇華報_レ国丈夫身。公私事辨焔須

速。措_レ背他年切要人。

「公私の事、辨じて、帰ることすべからく速やかなるべし」という

句を見ると、絶海が龍溪に言う「公私の事」のなかには、『蕉堅菓』

と『語録』の序や跋を中國僧に求めるといふ用件が含まれていたの

かも知れない。このことは薩木氏も指摘されている。こうして見る

と、『蕉堅菓』や『語録』に収められている作品は、絶海自らによ

つて敵運され、推敲を重ねられた可能性が高いだろう。現に『蕉堅

菓』に未収録の詩が、他書に見受けられることもあるし、同一詩の

詩題が、『蕉堅菓』と他書とで異なっていることもある。ただし、

『語録』には、先に挙げた「聞蔵主を送る」という偈に和韻した「蕉

堅大士の顔に同じくし奉りて、就きて龍溪知蔵の日東に還るに贈る

中印嶂の間叟如蘭」という偈がある。『蕉堅菓』の跋文を記した明

僧如蘭が、日本に帰る龍溪に贈つたものであるが、この壮行偈が

『語録』に収められているということは、龍溪の帰朝後に『語録』

が若干、増補された可能性を残しているよう。

なお、『蕉堅菓』や『語録』の編者の一人である鄂隱慧叡は、応

永二十四年(四二七)九月五日に天龍寺(第六十一世)、翌二十五年

(四二八)六月十二日には鹿苑院(相国寺の檀那塔をそれぞれ退院

し、急遽土佐に逐電した。足利義持(一三八六〜一四二八)との間に

不和が生じたためである(『仏慧正統国師鄂隱和尚行録』『看聞日

記』『滴濟准后日記』)。したがって、『蕉堅菓』や『語録』の編集

が確定されたのは、この出来事よりも以前ということになるだろう。

三 『蕉堅菓』一番詩〜十三番詩

さて、『蕉堅菓』の五言律詩を見ていくが、便宜的に全体を四区分し、考察を加えていく。一番詩〜十三番詩の詩題を掲げる。

- ・[真寂の竹菴和尚に呈す] (一)
 - ・[和す(豫章の老謬懷澗)] (一A)
 - ・[和す(豫章の蒲菴來復)] (一B)
 - ・[和す(延陵の夷簡)] (一C)
 - ・[湛然静者に呈し、并せて画を謝す 三首] (二)
 - ・[絶海の為に画き、并せて賦す(湛然静者患鑑)] (二A)
 - ・[良上人の雲間に帰るを送る] (三)
 - ・[三生石] (四)
 - ・[友人を期するも至らず] (五)
 - ・[北山の故人の房に宿る] (六)
 - ・[寶石寺の簡上人に寄す 二首] (七)
 - ・[古寺] (八)
 - ・[文煥章、姑蘇に帰る] (九)
 - ・[来上人、姑蘇に帰りて観省す] (一〇)
 - ・[俊侍者の具輿に帰るを送る] (一一)
 - ・[冬日、中峰の旧隠を懷ふ] (一二)
 - ・[早に発つ] (一三)
- まずは、「流水、寒山の路、深雲、古寺の鐘」という句で有名な巻

頭詩を見てみる。

一 呈真寂竹菴和尚

不堪長仰止。渚上寄高踪。流水寒山路。深雲古寺鐘。香
花蔽法云。水雪老禪容。重獲舊真菓。多生慶此逢。

この詩には、清遠懷澗(竹菴和尚)、見心來復(蒲菴和尚)、易道夷簡が唱和しているが、清遠の詩の序文には「予、真寂に帰老し、特に存慰を枉げらる。まさに江東に遊ばんとし、詩を留めて別れを為す。曰ふ有り、流水、寒山の路、深雲、古寺の鐘、と。(中略)遂に次韻して、用つて答ふ」、詩後の自注には「洪武六年、歲、癸丑に在り、冬十二月廿日、真寂山中に書す」とあり、絶海と清遠の詩の応酬が洪武六年(応安六年、一三七三)十二月二十日、真寂山において行われたことがわかる。また、易道の詩の序文に「まさに上国に遊び、人物衣冠の盛んなると、夫の吾が宗の碩徳禪林の衆きとを觀んとし、詩有りて竹菴に留別す。菴、喜びて之に和す。茲に示さるるを承り、復た予に徵む。遂に一首を次韻して、雅意に奉答すと云ふ」とあることから、見心や易道も、清遠が次韻した後まもなくして、絶海詩に次韻したと思われる。なお、詩題や序文からも明らかのように、これらの詩は、絶海が中国に留学している時に詠まれたものである。

つきに巻頭詩以外の作品にも目を向けてみると、その詩題から判断して、二番詩、三番詩、四番詩、七番詩、九番詩、十番詩、十一番詩、十二番詩はすべて、中国での作である。「湛然静者(患鑑)」と

は松源崇岳―無得覺通―虚舟普度―虎岩淨伏―独孤淳朋の法統を承けた仲銘忠鑑のことである。「文煥章」については、了菴清欲の法嗣天彰文煥を指摘する意見(入矢氏・梶谷氏)もあるが、「天彰煥」や「煥天彰」ではなく、「文煥章」とあるので、少しく疑問を持たざるを得ない。「雲間」とは現在の江蘇省松江県、「三生石」とは中天竺寺の名勝(『扶桑五山記』)、「寶石寺」とは浙江省杭県の西湖北岸に聳える寶石山中に位置した禪院、「姑蘇」とは現在の江蘇省呉県、「呉興」とは浙江省呉興県、「中峰の旧隱」とは中天竺寺のことである。

八番詩や十三番詩に関しても、「断碑、歲月無く、唐宋、竟に尋ね難し」や「天廻かにして、長河没し」首を回らせば、搏桑の日、還た萍実の朱きが如し」という詩句があることから、中国での作であろう。とくに十三番詩には、望郷の念を胸に秘めながらも、中国大陸を行脚して禅道修行に精進する、当時の(青年)留学僧たちの真摯な姿を見ることが出来る。

一三 早発

冬行苦短日。葺食戒長途。雪暗関河遠。風吹鬢髮枯。荒山雖可度。積水若為逾。岸転橋何在。沙危杖屨扶。漁篝残近渚。僧磬徹寒蕪。楚興潜中動。衰容頗外蘇。破衣江上步。

円笠月中孤。天迴長河没。曙分群象殊。寒烟人未舞。野樹鳥相呼。回首搏桑日。還如萍実朱。

なお、五番詩と六番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、前後の作品との関係を考慮すると、中国での作であ

らう。六番詩の詩題の「北山」は、中国五山第二の北山景德靈隠禪寺のことかも知れない。

四 十四番詩および十五番詩

・[野古島の僧房の壁に題す](二四)

・[山水の図に賦して、無外の瑞鹿に帰るに贈る](二五)

十四番詩について。「野古島」は博多湾の中央にあり、明との交通の要衝だったようである。鉄菴道生の『鈍鉄集』(『五山文学全集』第一巻所収)には、博多八景の一つとして「野古帰帆」が詠まれている。したがってこの詩は、絶海が中国から帰国して、九州で静養している時に詠まれたものである。

十五番詩について。「無外」とは無外円方(？)一四〇八、「瑞鹿」とは瑞鹿山円覚寺のことである。確かに無外は円覚寺の住持(第六十世、『扶桑五山記』)による。ただし、入院した年月日は記されていない(を勤めているが、彼が同寺に帰った時期、動機、目的等は明らかではなく、その詩句を見ても、この詩の詠作状況を詳らかにすることは難しい。

五 十六番詩と十九番詩

・[東宮の秋月 二首](一六)

・[菊上人の京に入るを送る](一七)

・[出塞の図](一八)

・「光侍者を送る」(一九)

十六番詩の本文を挙げる。

一六 東宮秋月 二首

①秋夜関山月。高懸細柳營。中軍嚴下令。万馬肅無声。寒影旌旗湿。斜光睥睨明。何人横し架賦。愁し殺老書生。

②南国秋新霽。東宮月正中。光寒凝し列戟。弦上字し彎弓。連し海風雲慘。振し山金鼓雄。安能永良夜。一照万方向。

『空華集』卷第十三の「大慈寺八景詩歌集の叙」に、

日州大慈精舎。其地蓋負山而臨海。一目万里。実九州山川第一偉觀也。好事者。采其景最絶者八。而目之。曰大慈八景。其曰龍山春望。言宜乎春也。曰古寺緑陰。言宜乎夏也。曰漁浦帰舟。以詠漁父也。曰埜市炊烟。以埜市隠也。曰橋辺暮雨。示防卒暴也。曰江上夕陽。示迫桑榆也。其山城宜月者。曰東宮秋月。所以警夜也。其宜雪者。曰西塞夜雪。所以戒不虞也。

とあるように、「東宮秋月」は日向の大慈寺八景の一つである。大慈寺八景の成立の経過を同叙に見てみると、九州探題として西国の平定を任されていた今川了俊(一三二六く?)が、龍興山大慈寺(鹿児島県曾於郡志布志町志布志)に八景があることを知り、瞬菴宗久なる道人を上洛させて、八景を題にして公卿には和歌を、禅僧には漢詩をそれぞれつくらせたという。『日工集』康暦二年(一三八〇)七月十八日条に「(柏庭)清祖侍者の求めの為に八景目子を改む。けだし日向州龍興山大慈寺の境地なり」、同廿七日条に「雲居庵に往き、

普明国師(春屋妙絶)と説話す。即ち大慈八景龍山春望詩を出示せらる」とあることや、大慈寺八景の全作品が収録されている『雲巢集』(『五山文学新集』第四卷所収)を見ると、絶海の「東宮秋月」詩(第一首目のみ所収)に「慧林住持 絶海 中津」と記されていることなどから、この十六番詩は、康暦二十年十月八日に絶海が甲斐の恵林寺に入寺した後まもなくして、同地において詠まれたと思われる。さて、十七番詩の序文にはつぎのようにある。

菊上人甲産也。蚤游し上国。従し師隸業。孜孜不し倦。而温乎其容確乎其志寔後進之秀也。壬戌春。謁告来寧訪し予林下し游し。従于茲し兩月矣。三月首自京書来。勅還卒業。上人聞し命。翌日登し塗。略無し難色。臨し行請曰。幸得し一言。以為し再参之献。其請亦勤矣。上人乃吾月舟老兄之子。而視し予叔父也。於今行し其可し無し言乎。力作し小律一首。少答し盛意。且求し月舟老兄之教云。

甲斐出身の菊上人は、早くから京都に遊学していたが、永徳二年(壬戌、一三八二)の春、郷里である甲斐の絶海の許を訪れ、二ヶ月ほど滞在した。そして三月の初めに京都に戻るといので、絶海は送行の詩(偈)、すなわちこの十七番詩を作ったのである。菊上人については未詳であるが、「上人は乃ち吾が月舟(周勲)老兄の子にして、予を視ること叔父たり」とあるように、月舟周勲の弟子である。

『仏智年譜』文和二年(一三五三)条には「師、年、十八、錫を東山建仁に掛く。信義堂、恬先覺(先覺周怙)、勲月舟、寿天錫(天錫周建仁)に掛く。信義堂、恬先覺(先覺周怙)、勲月舟、寿天錫(天錫周

寿)等と同じく、龍山(徳見)和尚の高風を慕ふ」とあり、建仁寺の龍山徳見(第三十五世)に月舟が師事した際、絶海も後輩の同参だったようである。

また、第十九番詩の序文には、

明絶上人暫如「相陽旧隠」專訪「月潭師」。詩以祖「行色」。時明絶とある。家兄在「軍」。故末語及此。

とある。詩題の「光侍者」と序文の「明絶上人」とは同一人物で、明絶□光のことである。ちなみに「明絶侍者の雪中の顔に次す」(九六)の「明絶侍者」もこの人であろう。また、「月潭師」とは月潭中円のことである。玉村氏『五山禅林宗派図』(思文閣出版、昭六〇)によると、法系は夢窓疎石―義堂周信―月潭中円―明絶□光とある。「相陽の旧隠」とは、詩中に「新寺は南陽の塙」とあることから、南陽山報恩寺のことである。

『蕉堅藁』所収の「円覚の権庭和尚に与ふる書」(一五三)には「夏間に(明絶)光侍者の職事をして、虚中(梵亮)に私す。計らずも輒ち尊聴に徹し、卒かに能く侍香をして職せしむ。甚感甚荷」や、「茲に光侍者の帰参に因りて、草々に修布す」という文章がある。稿を改めて検討するが、この書簡は甲斐でしたためられたと考えられるので、明絶は、甲斐で絶海に従事した学徒のうちの一人だったのである。『仏智年譜』(康暦二年条)には、

凡在京師相陽。有名之英衲雲集。寺屋殆乎無所容。師不拒之。孜孜誘掖也。学徒参叩。禪宴餘暇讀而講。法華楞嚴円覚

等。緇素聴衆汎溢矣。蓋師旺化權輿于此矣。

とあり、当時、惠林寺に入院した絶海の許には、京都や相模の有名な僧(菊上人や明絶を含む)が大勢集まり、各々が求道精神を燃焼させていたことがわかる。そして明絶がしばらく報恩寺の月潭を尋ねて行くというので、絶海は送行の詩(偈)、すなわちこの十九番詩を作ったのである。序文に「時に明絶の家兄、軍に在り」とあり、詩中に「四郊、戎馬の塵」とあるが、この当時、関東では、小山氏が反乱を起こしていた(小山氏の乱、一三八〇〜九七)。ちなみに、これも稿を改めて検討するが、甲斐でしたためられたと考えられる「法華の元章和尚に与ふる書」(一四九)には、「今夏、州兵、東征し、軍須、百端、民戸、之が為に騒然たり」という文章もある。なお、十八番詩の詠作状況は、この詩が題画詩ということもあり、詳らかにすることは難しいが、前後の作品との関係を考慮すると、甲斐での作であろう。絶海は小山氏の乱を念頭に置いて、この「出塞の図」(一八)を詠じたのかも知れない。

六 二十番詩〜二十二番詩

・「千里明月の画軸に題して、濡侍者に寄す」(二〇)

・「白雲山房の画軸に題す」(二一)

・「巧拙叟、親を省す」(二二)

二十番詩の本文を挙げる。

二〇 題「千里明月画軸寄濡侍者」

隔千里今共明月。是蓋謝希逸想皓月而詠懷者歟。千載之下詠之使_レ人愴然。龍山天休濡上人遠游江東而未還。洛社諸彦詠謝氏之旧歌。以寓懷焉。懷而不已。輒命_レ絵事。以聲_レ縣縣裝潢。寄以徵_レ予詩。予老矣而廢詩久如。迫_レ于諸彦之督責。遂弘_レ拭筆研。率然而作云。

京華与江表。相別又相望。唯有九霄月。共茲千里光。山空還独夜。水闊更殊方。願影徒延佇。不堪清漏長。

序文によると、瑞龍山南禅寺の「天休濡上人」が遠く「江東」に遊学していまだに帰らないので、京都のすぐれた同志たちは謝希逸の旧歌「美人逸きて音塵闕ゆ。千里を隔てて明月を共にす」(『文選』卷第十三「月賦」)を詠じて思いを寄せた。そしてその尽きせぬ思いを詩に詠み、画工に命じて表装してもらい、絶海の許に持参して詩を求めたので、絶海も詩とその序文を書いたという。

なお、「天休濡上人」については、島田修二郎氏も指摘されているように、惟忠通怒の『雲壑猿吟』(『五山文学全集』第三卷所収)に「題千里明月図寄東濡侍者」という詩があることから、天休東濡なる禅僧のことであろう。天休に関する履歴は、現在まで全く知られていないが、絶海や惟忠、さらには惟肖得巖等が詩を題した詩画軸(「千里明月図」)を贈られており(贈り主は不明)、当時の彼の宗教活動ならびに文学活動が大いに偲ばれる。また「江東」に関しては、長江の東と解する説(入矢氏・梶谷氏)と、近江の東と解する説(薩木氏)とに分かれている。

さて、序文に「予は老いたり」とあるように、この二十番詩は、絶海が晩年、京都で大寺院の住持を勤めている時に詠まれたと考えられる。したがって、つぎの二十一番詩、二十二番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、やはり京都での作になるだろう。なお、「白雲山房」とは円覚寺山内の白雲庵、「巧拙叟」については未詳である。

おわりに

以上のように、今回は『蕉豎藁』の五言律詩(一)〜(二)を見てきた。なかにはその詠作状況が判然としないもの―十五番詩、十五番詩十八番詩、二十一番詩、二十二番詩―も含まれていたが、絶海自身が作品を厳選、推敲したこと、前後の作品との関係などを勘案すると、一番詩〜十三番詩は中国での作、十四番詩は九州での作、十五番詩は九州、近江、甲斐のいずれかでの作、十六番詩〜十九番詩は甲斐での作、二十番詩〜二十二番詩は京都での作というように、その配列は詠作年代順に整理されているように思われる。ただし、巻頭詩に限っては、作者絶海の自信作が採られた可能性もある。次稿でも引き続き、今回の結果を踏まえながら、『蕉豎藁』の五言律詩以外の作品配列を見ていくつもりである。

〔注〕

(1) 引用は大谷雅夫氏他校注『日本詩史 五山堂詩話』(新日本

古典文学大系、岩波書店、平三)による。

(2) 蔭木英雄氏『義堂周信』(日本漢詩人選集3、研文出版、平

一一)、同氏『蕉堅藁全注』(清文堂、平一〇)。

(3) 諸本間に詩文の取捨による異同はなく、配列順序も全く同じで、寛政本には多少の誤脱が見られるものの、行換えや欠字部
分(六十番詩第四首目の二句目「休居幸免□時疑」、八十番詩
Bの序文「(上略)□□壬午秋余使日本国一見万年山中沐以旧
遊為懷數相詢慰。(下略)」)も同じなので、今のところ『蕉堅
藁』の諸本は同一系統であると言えよう。

(4) 引用は『大正新修大藏經』第八十卷「統諸宗部」による。

(5) 蔭木氏「義堂周信・絶海中津」(『仏教文学講座』第三卷「法
語・詩偈」所収、勉誠社、平六)。

(6) 建仁寺兩足院藏『東海瑠華集(絶句)』(『五山文学新集』第
二卷所収)には、作者惟肖得巖の先輩五山文学僧「義堂周信、
絶海中津、無求周仲、雲溪支山、觀中中諦、中巖圓月等」の七
言絶句が百七首挙げられている。絶海に関しては二十二首採ら
れているが、そのなかには、『蕉堅藁』に見受けられないもの
〔漫書芭蕉〕〔謝人患蕉苗(等)や、』蕉堅藁』とは詩題が異
なっているもの(例えば「答義堂和尚見寄」。「蕉堅藁』では
「九七 錢原にて清溪和尚の顔に和す)、詩句の文字に異同が
あるものが含まれている。玉村竹二氏はこの兩足院本に関して、
「この本は、江戸初期の写本であるが、その親本となった本は、

或は惟肖の草稿本であったかとも思われる」(『義堂・絶海等の
詩は、作品がいずれも惟肖に関係の深い人のものばかりである
から、惟肖が先輩の作品を勉強のために抜萃して座右に備えた
ものと考えられないこともない』(「解題」)と指摘されている。

(7) 引用は『大正新修大藏經』第八十卷「統諸宗部」による。

(8) 島田修二郎、入矢義高氏監修『禅林画賛 中世水墨画を讀
む』(毎日新聞社、昭六二)。

(9) 前の十四番詩が九州での作、後の十六番詩が甲斐での作なの
で、『蕉堅藁』所収の五言律詩の配列が詠作年代順になってい
ると仮定すると、「山水の図に賦して、無外の瑞鹿に帰るに贈
る」(一五)の詠作場所としては、九州、甲斐、そして近江の
場合が考えられる。無外の履歴については、『延宝伝灯録』『重
続日域洞上諸祖伝』『日工集』等を見ても、その大略しか知り
得ない。武蔵の出身で、東明慧日―不閤契圓―無外円方という
法統を承けた、いわゆる曹洞宗宏智派かんしに属しており、肥前の水
上寺に出任した後、淨智寺、円覚寺(第六十世)、建長寺(第
七十六世)と歴住し、大隅の宝寿寺の開山にもなっている。義
堂とも親交が深く、主として関東周辺で活躍していたようであ
るが、九州にも足を伸ばしており、この十五番詩は九州での作
なのか、それとも甲斐での作なのか、判別することは難しい。
近江で詠じられた可能性もあながち否定できない。

——あきくら・ひとし、広島大学大学院博士課程後期在学——